

岡谷市議会 産業建設委員会 行政視察報告書

【総体事項】

1. 視察日程：平成29年10月16日（月）～18日（水）

2. 調査事項（視察先）

- | | |
|-------------------|------------|
| (1) 「道の駅もてぎ」について | (栃木県 茂木町) |
| (2) ブランド戦略の推進について | (栃木県 宇都宮市) |
| (3) テクノプラザおおたについて | (群馬県 太田市) |

3. 視察参加者委員

委員長	渡辺	雅浩
副委員長	今井	義信
委員	笠原	順子
委員	共田	武史
委員	八木	敏郎
委員	渡辺	太郎

【視察地報告】

1. 調査事項

道の駅もてぎについて（栃木県 茂木町）

人口：約1万2千人 面積：約172km²

（視察事項）

茂木町は、栃木県の南東部、茨城県との県境に位置し、宇都宮市から31km、東京から100km圏内にある自然豊かな町である。

道の駅もてぎは、茂木町の西の玄関口に位置し、平成9年8月1日に開業したツインリンクもてぎや、当時建設計画が進められていた国道123号バイパス整備にあわせ、町が平成5年自治省（現総務省）の若者定住促進等緊急プロジェクトの指定を受け、十石地区に整備を進めてきたものである。

目的としては、新たな「もてぎ」の情報発信基地であり、具体的には地場産品のPR（紹介・展示）や販路の拡大、及び新商品の開発など、もてぎまちの産業振興の場として位置付けている。

平成8年4月16日には栃木県第1号として建設省（現国土交通省）の「道の駅」の登録を受け、現在では、ドライバーに優しい施設づくりを目指すとともに、県内外に「もてぎ」の存在を広くアピールしている。

また、道の駅「もてぎ」は平成27年1月、全国1,040の道の駅から、地方創生の拠点となる施設として注目を集め、国内6カ所の全国モデルに選定されている。平成28年3月、道の駅施設内にオープンした「バウム工房ゆずの木」では、茂木産コシヒカリを使用した「米粉バウムクーヘン」が好評を得ている。また、道の駅を運営するもてぎプラザが新たな農地所有適格法人「美土里農園」を立ち上げ施設園芸など農業経営に参入している。

2. 視察日時 平成29年10月16日（月） 13:30～15:30

3. 参加者所感

○行政としてアンテナを常に国の動向に向け、活用できる交付金を的確に捉えることが必要。

- 茂木町の「道の駅」構想の考え方がそのまま岡谷市に通用するとは考えないが、「何を核にするのか」を明確に捉えることから始めないといけないと考える。
また、岡谷市ならば「シルク」をキーワードとして、現状の課題の拾い出しをまず考え、長い時間がかかることを前提として、計画しなければならないと考える。
- 公務員感覚ではなく、民間感覚による創意工夫の努力が随所に見える。町のアンテナショップとして大きな成果を上げ、創意工夫の商品開発と販売戦略が良好な結果に表れているが、「道の駅が無くなれば茂木町が無くなる」との町長の強い意志と目標が活性化に結びついているように感じられた。
また、給与水準を上げることを目指していることに感心した。
- 少子高齢化、人口減少の進展により、行政全体が縮小傾向にある中で、地域資源を活用した攻めの戦略が、魅力と活力あるまちづくりに結び付き大きな成果が感じられた。
また、リーダーである首長の一念も重要と感じた。現在、「道の駅」は地方創生の1つの象徴のような位置付けがされているが、残念ながら岡谷市には道の駅が無い。今後、岡谷ブランドの象徴として、市の魅力と活力の場を担うような道の駅の設置について、積極的な研究が必要であると思う。
- 町長の公約、リーダーとして働いている職員の方の願いと行動力が伝わって来た。
- 岡谷市でも将来道の駅が欲しいと思う。農産物では見劣りする部分があるが、発想を変えれば、新型道の駅も可能ではないかと思う。

【視察地報告】

1. 調査事項

ブランド戦略の推進について（栃木県 宇都宮市）

人口：約52万人 面積：約416km²

（視察事項）

市の認知度、信頼度を高めるため、市のマスコットキャラクター「ミヤリー」による全国への情報発信など、広く宇都宮の魅力を伝える取り組みや、「愉快市民」によるPR活動や写真展など、宇都宮を好きになってもらえるような参加・体験型の取り組みなど、独自の都市ブランド戦略を展開している。

また、宇都宮市に活動拠点を置く3つの地元プロスポーツチームと連携し、ユニホームに宇都宮のブランドロゴマークを掲載、また、宇都宮の日常の暮らしの良さを伝える「ダブルプレイス」をフェイスブックページ「宇のコト」や雑誌「ソトコト」、首都圏でのPRイベントなどの様々な媒体をとおして発信している。

宇都宮ブランド戦略が目指す最終的な姿は、「餃子のまち」といった宇都宮の一部にとどまらない、宇都宮市のイメージ・魅力が高まり、市内の人が誇りを持って住み続け、さらに、市外の人たちに対しても積極的に宇都宮市をPRしている状態になることであり、宇都宮市が「憧れを持って注目される都市」になり、認知度や魅力が高まり、訪れたり、住んだり、企業が立地したくなる都市になることである。

プロジェクト名「宇都宮プライド」は、「100年先も誇れるまちを、みんな」を合言葉に、宇都宮市内外のみなさんと宇都宮の魅力を考え、発見し、形作り、発信していく取り組みを「宇都宮プライド」と名付け、全市一丸となって取り組んでいる。

2. 視察日時 平成29年10月17日（火） 9：30～11：30

3. 参加者所感

○ブランド推進に際し、明確な理念を持つこと。

ブランド発信する中に、基本方針を設定する上でのデメリットが明確に示されていた。計画段階でこうした負の要素を明確に捉え、対応していく手法が必要と考える。

○事例紹介であった首都圏近傍を活用し、2地域生活（ダブルプレイス）を情報発信し、宇都宮を観光的視点で楽しんでもらうという取り組みが岡谷市でもできないか。

○宇都宮ブランド戦略の平成29年度の目標値は、宇都宮在住を自信を持って言える人の割合を60%、宇都宮に愛着のある人の割合を75%、宇都宮に行ってみたい人の割合を30%と明確にし、それに向けて宇都宮ブランド推進協議会を構成し、様々な施策を積極的に展開していく点に感心した。

○宇都宮ブランド指標として、宇都宮愉快市民登録数、オリジナル愉快ロゴ登録数、住めゆかロゴ認知度、市のマスコットキャラクター「ミヤリー」認知度などユニークで面白い。行政の取り組みの視点として、「楽しい、愉快」と感じられるイメージは重要と感じた。

岡谷市も、歴史ある地域資源の活用方法について、より明確な目標と市を挙げての積極的な取り組みが必要と感じた。

【視察地報告】

1. 調査事項

テクノプラザおおたについて（群馬県 太田市）

人口：約22万4千人 面積：約175km²

（視察事項）

太田市は、人口約23万の工業都市で、工業出荷高、製造品出荷高は群馬県で1位、北関東で4位、全国で13位であり、約2兆6千億円である。

ほとんどが輸送関連機器であり、スバルなど自動車関連産業が強く、全体の73%を占めている。昭和53年から38年間であるが群馬県内1位であり、現在のところ堅調に推移している。

太田市の産業基盤であるものづくり産業の発展及び中心市街地の活性化を図り、高度な専門知識を有する教育研究機関である群馬大学大学院研究部システム工学専攻をテクノプラザおおたに誘致し、産学官連携を完成させ、地場産業に直結した共同研究開発、ものづくり人材育成の推進を目的として、平成20年2月に建設した、また、産業基盤の発展という目的から、研修室などの貸し部屋、そのほか、計測室や電子顕微鏡室など、中小企業向けの設備も整備している。

また、太田市の産業にとってより高度な人材育成と、地域企業のニーズにあった技術開発研究を推進するために、専門家要する機構の技術相談窓口や研究支援、教育研修、共同研究、人材育成などを行う必要から産学官連携して、地域産業の発展と人材育成を目指した法人として、一般財団法人地域産学官連携ものづくり研究機構を太田市と商工会議所の出資で平成21年1月に設立している。

2. 視察日時 平成29年10月18日（水） 9：30～11：30

3. 参加者所感

○テクノプラザおかやが目指すべき方向を更に明確にする事。また、多くの中小企業が存在し、支援していくための更なる組織づくりが必要と考えた。

- テクノプラザおおた内に群馬大学、工作機械、測定機器が集約され、使いやすい施設との印象を持った。岡谷市には、長野県工業技術総合センター、岡谷技術専門校がコンパクトにまとまっている事は他自治体に対して誇れる。
- 産業の約73%がスバルを含む自動車関連企業である。大事な点は、中小企業支援であり、労働力の確保、技術の承継、企業間のマッチングなど、人と人をつなげることが一番重要との認識は大いに参考になった。また、産学官が連携し、地域産業の発展には人材育成が欠かせないという意識も十分に感じられた。人を大切にするからこそ、今後、自動車のエンジンがモーターへと変換していく等の時代の変化にも対応できるのだろうと思われた。
- 企業誘致等において、土地に恵まれていない岡谷市として、岡谷ICのアクセスや諏訪湖サービスエリアのスマートICの設置など産業振興戦略の重要なアイテムではないか。
また、太田市の企業立地の案内パンフレットの反対側は暮らしの案内が掲載されており、企業誘致や産業振興と市民の暮らしは一体であり、人を大切にする事の重要さは、ここでも見て取れて大変参考になった。
- 子どもたちにもものづくりに興味を持たせるような企画を毎年夏休みなどに設けていることをお聞きし、いろいろなものづくり体験できる企画を考え取り組んでいくことが重要だと感じた。